

HEARTFUL

笑顔と心をつなぐネットワーク はーとふる

2021年
春号

■特集

東日本大震災から10年 わすれない、いつまでも

|連載|

環境問題を考える

われら明社人 **青森** 「明るい社会づくり運動県南地区協議会」





苦難の先にあつた 新たな使命

春四月、黄色い帽子をかぶった小学一年生の笑顔を見るたびに思い出すことがあります。

今年で五十周年を迎える「山梨県明るい社会づくり運動協議会」では、設立七年目の昭和五十三年から、地元新聞社と県内諸団体の協力を得て、新入学児童に「黄色い帽子を贈る運動」を提唱。県民の善意を集め、子どもを交通戦争から守る運動を展開してきました。

その間、明るい社会づくり運動もNPO法人化など、様々な組織再編に取り組み、山梨でも県明社の解散や黄色い帽子を贈る会の設立など、厳しい局面を乗り越え、黄色い帽子は絶えることなく贈られてきました。

しかし、平成十七年、全国で幼い命を狙った事件が相次ぎ、地元の小学校PTAの会合で「黄色い帽子は目立つからやめよう」との声が上がったのです。

長年取り組んできた運動が消えてしまうかも知れない。私は、今こそ県民に訴えるべき時と考え、公開シンポジウムを提案し、開催にこぎつけました。

コーディネーターの県ボランティア協会・岡尚志常務理事(当時)は、交通事故よりも子どもたちを犯罪からどう守るかが課題であると分析。会場からは「黄色い帽子は、子どもを地域全体で守っていく証として必



つるた
鶴田 啓二

特定非営利活動法人明るい社会づくり運動 理事
山梨県宗教者懇話会 事務局長
山梨県明るい社会づくり運動協議会 委員

要だ」など、活動を支持する声が相次ぎ、黄色い帽子は目立つからこそ犯罪を防ぐシンボルにして、「地域みんなで幼い命を守ろう」という結論を得たのです。地元マスコミも大きく報道し、県民挙げての機運が盛り上がり、登下校時の見守りボランティアも誕生しました。第二弾として、地元出身のシンガーソングライター・澤登秀信さんによる愛唱歌の制作です。このCDは全県下の小学校に贈呈され、入学式はもとより昼休みなどに校内放送されました。また、澤登さんと子どもたちによるコラボで生出演したNHK「旅するラジオ」は大きな反響を呼びました。

この「黄色い帽子」はそれまで誰が贈っているのか分からない、不思議な帽子と言われていました。しかし、シンポジウムに参加されたある町長さんの言葉に皆が頷きました。「送り主が分からないからこそ、私たちの誇りなんです」と。こうして先人たちが贈り続けてきた地道な活動に、また時代が「幼い命を守るという新たな使命」を与えてくださったのだと思います。この危機を多くの善意で乗り越えた「黄色い帽子を贈る運動」は、結果として県明社再結成の力を得て、新たな県民運動を目指して出発することができました。

耀メッセージ

- 1……特集 東日本大震災から10年——わすれない、いつまでも
- 8……環境問題を考える——地球の未来を守るのは私たち!
- 10……われら明社人
- 13……全国清掃キャンペーン
- 14……Palネット
- 16……掲示板
誌上名刺交換
耀! 連隊 明社レンジャー

Contents

はーとふる2021年 春号

【目次】

特集 東日本大震災から10年——

わすれない、 いつまでも

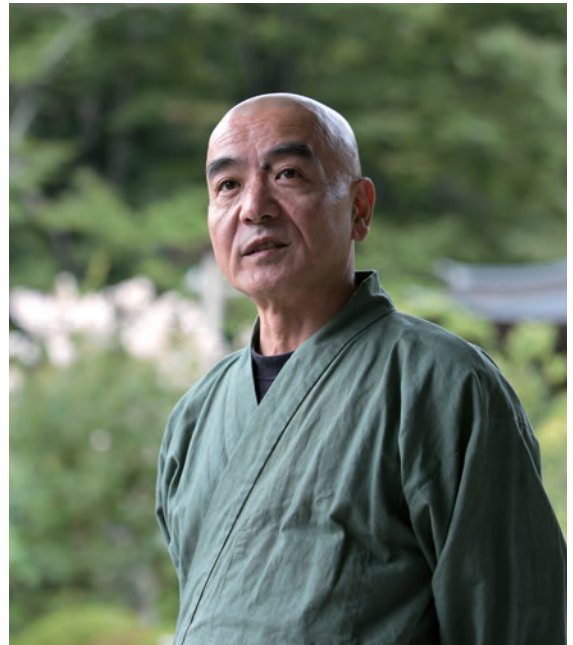
2011年3月11日、東日本大震災に見舞われました。巨大地震と大津波、そして、福島県においては、原発事故といった未曾有の災害に見舞われて、多くの方々が犠牲になりました。

あれから10年。瓦礫^{がれき}と化した街は復興をたどり、人びとの生活は日常を取り戻したかのように見えます。しかし、いまなお避難を余儀なくされ、避難生活をされていらっしゃる方もいます。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、被災された方々の“心の復興”ができる日まで寄り添っていきたいと願っています。私たちは“あの日”をわすれない、いつまでも……。

命の記憶



玄侑
宗久



げんゆう そうきゆうProfile

作家・臨済宗福聚寺住職。花園大学仏教学科および新潟薬科大学応用生命科学部客員教授。1956年福島県生まれ。慶應義塾大学中国文学科卒業後、京都天龍寺僧堂に入門。「中陰の花」で芥川賞、「光の山」で芸術選奨文芸大臣賞。震災後は政府復興構想会議委員、「たまきはる福島基金」理事長。近著は「莊子と遊ぶ」「やがて死ぬけしき」「竹林精舎」「なりゆきを生きる」など。公式サイト <http://genyu-sokyu.com/>

「過去は変えられます」、そう言うと、大抵の人は疑わしい目を向ける。「そんなこと言いますが、たとえばいつ父親が死んだとか、その事実が変わるわけではないでしょう、確かにそれはそうだ。」

しかし過去の記憶とは、どうやらそうした事実だけではなく、必ず何らかの感情でその事実を包み込んだものらしいのだ。感情的なインパクトが芯になって記憶が形成される、と言ってもいい。

東日本大震災で、両親を同時に失った中学三年の女の子がいた。高校進学を望んでいたが、親戚の家に預けられ、やがて近く

の工場に勤めることを決めた。両親の死は、彼女の運命をそんなふうに変えた意味でも哀しく、また絶望的な記憶だった。

しかし彼女は、その工場で優しい先輩に出逢い、心の空洞が埋められていくような慰めを感じる。そして両親の死から六年経ち、その優しい彼との結婚が決まり、両親の七回忌の法要に臨んだのである。想像で生きるだろうが、二十一歳の彼女は将来に夢もあり、生き活きしていた。そして法要後私に近づいてくると「両親のおかげで彼に出逢えたし、しあわせです」とはにかみながら話したのである。

両親の死の「せいで」進学を諦め、不本意ながら就職した彼女だが、その時は同じ死の「おかげで」満ち足りているという。明らかに事実を包んだ感情の包装が変わった、そうは思わないだろうか。これを私は「過去は変えられる」と申し上げているのである。

一九七二年にノーベル生理学賞を受賞したジェラルド・エデルマンは、「神経ダイウイニズム」と呼ばれる理論のなかで、記憶が周囲の環境に対する応答によって柔軟に構築されると述べている。じつはこれ、もっと昔にお釈迦さまが話したことにも重

なる。つまりお釈迦さまはいわゆる「事実」を貯木場の材木に喩え、記憶とはその材料で家を建てることに似ていると言う。同じ材料でも、人はその時の気分によってはテラス付きの明るい家を作ったり、時には藏のような密閉された家を作るかもしれない。材木が同じでも全く違う家ができるのと同様に、人が憶いだす記憶とは、その時の気分や状況に大きく左右されるということだろう。

だから我々僧侶は、葬儀や年忌法要を行なうのだ。好いはずのない死の記憶を、少しでも好い方向に改変できないか、いや、新たな記憶にすることもできるはずだと信じて法要を行なってきた。これから過去を変えろという不遜な試みを続けていくはずである。

ところで東日本大震災の特異性の一つは、行方不明者の多さだろう。遺体や遺留品などが見つからなくとも、今回は「死亡届」を出すことができるとされた。しかし今尚二千五百人ほどが行方不明のままなのだ。「死亡」とされれば国から弔慰金も出る。世帯主なら五百万円、それ以外なら二百五十万円である。おそらくそれも「死亡届」が出されない原因の一つではないだろうか。遺骨にこだわる日本人の性はある

にしても、遺骨もないのに身内の死でお金を貰うなど、とんでもないと考えているに違いない。

しかしそうすると、行方の知れない人は死者としても記憶されず、むしろ記憶の改変なども起こりえず、いわゆる「中有」「中陰」（この世とあの世の間）を彷徨うことになる。

二〇一三年七月、京都大学こころの未来センターで「東日本大震災後の幽霊について」のシンポジウムが行なわれた。タイトルこそ「こころの再生に向けて」だが、実質は幽霊についての議論だった。おそらくこれは、日本で初めて幽霊を学術的に扱った事例ではないだろうか。幽霊を目撃した人の多くが、「出て来てくれて嬉しかった」と話しているという報告が興味深かった。

いわば七年忌に当たる頃、私はある行方不明者の葬儀を頼まれて執り行なったことがある。依頼者は、「死んでいてほしくないが、もしも死んでいたらお葬式もしないでは可哀想だし」と頼む理由を語った。一定時間の儀式のあとで、行方不明の女性を思う老夫と息子夫婦は涙を流し、「これで安心して、生きてるかもしれないと思える」と、不思議なことを言った。もし万が一死んでいても、葬儀をして位牌もできた

から安心だというのである。

結局人は、信じたくない事実は余程の見聞をしないかぎり記憶しないのではないだろうか。事実からも記憶からも遊離して彷徨う幽霊……。しかし石巻などの例を聞くと、そうして葬儀を行なうと幽霊としては出てこなくなる事例が多いようだ。儀式によって新たな出発のための記憶が創出されるのだろうか。

記憶の改変や創出、憶いだすというシステム、そして記憶にさえならず彷徨う夢のような存在など、さまざまなことを書いてきたが、総ては我々が死者（あるいはその記憶）と共に生きているという話である。幽霊であれ、記憶のなかの死者であれ、我々は無意識に彼らの声を聞き、影響を受けながら、その総体を「わたし」と思い込んでいるのではないか。年をとるほどに記憶の中の死者は増える。震災から十年を節目に、それを豊かなことと受けとめたいものだ。

二月十三日夜十一時七分、私は自室で巨大な余震を体験した。机にしがみつき、本棚から本が飛ぶのを見ながら久しぶりに剥き出しの自然に恐怖を感じた。この恐怖は、無数の先人たちの命の記憶なのではないか……。個人では変えようのない記憶が、この命を守っているのかもしれない。

あの日から10年



岩村 雅裕

青森県八戸市在住

2011年3月11日午後、激しく、しかも長い揺れ。新聞社のカメラマンだった私は機材と防寒着を掴み車に飛び乗って八戸港を望む高台へ。余震が続く中、住民がぞくぞくと集まってくる。幼稚園児が震えながら避難してくる。地震の直後はまだ福島親戚に電話が通じ互いの安全を確認し、仕事にもどる。ラジオから宮城・岩手方面の情報が入る。それからしばらくして海面に変化が現れた。海水が渦をなしてどんどん流れ出し一部海底が見える。やがて沖から海水が壁のようにつき防波堤を越える。岸壁に打ち付ける真っ黒い津波が漁船を翻弄し渦巻

く。そして河口を遡る海水、逃げ遅れた船が黒煙を吐くが押し戻される。避難する人影が建物の陰に消える。車が流され家が流され、漁船が何隻も岸壁に横倒しになる。

過去に二度、震度5強（十勝沖地震、三陸はるか沖地震）の経験がある私でも心臓がドキドキするのが止まらなかった。水没した車はライトが点りクラクションが鳴り続ける。やがて日が暮れると全市停電で真っ暗に。わずかに工場群の自家発電の明りだけが灯った。津波は引いたものの、港内は潮が渦巻き、橋げたにゴンゴンとぶつかる船の音だけが響いた。すっかり暗くなってカメラに



何も写らなくなり引き上げると、停電した街は本当に真っ暗だった。

私は深夜に仕事を終えると、父の面倒を見てくれた妻と合流、その後はどうしたか記憶が飛ぶが、その夜の星空はこれまでに見たことがないほどにきらきらと輝いたと覚えている。

翌日からは周辺の海岸線を回り一日一日その被害の大きさを目にする日々が続いた。1か月後、車にテントやガソリンを積み仙台、福島から三陸沿岸をたどり被災地のリポート。八戸に戻りその様子を伝える写真展、そして1年後にもう一度同じコースをたどり写真展を行った。あとは仕事が変わったこともあり、直接被災の現場に行くことは無くなった。しかし個人的には福島に嫁いだ娘のところへ何度か行き来する道すがら、その沿道の様子は気にかけて見ていた。

震災から10年、日常がすっかり戻ったわけではないが、みんなができることを一生懸命頑張っているところにまたして

も疫病という試練、さらには2月13日の地震。永遠に続く日常と思えたものも自由にはならず、まさに無常を感じる日々だが、やがてこれもいつかは乗り越えていく日が来るのだろう。特に福島第一原発の廃炉もまだまだだし、その近くで孫たちが暮らしていることは、もう私の生きていく間その経過に注目し続けなければならぬのだと、いまあらためて思う。

明るい未来を残すために……



伊藤 亜里采
福島県いわき市在住

とても長くてあつという間の時間でした。

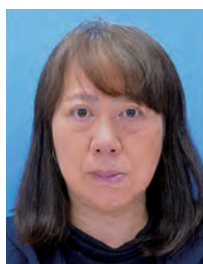
当時、私には3才、2才、4か月の子供がいました。3月11日、突然の激しい揺れにとっても驚き、子供たちを抱え外に飛び出しました。止むことのない余震と大津波警報の中、仕事だった主人が急

いで戻ってきてくれたため、海に近い自宅から避難することができました。幸い自宅は無事でしたが少し離れたところは津波の被害で瓦礫の山……。絶望と悔しさでどうしたらよいのかわかりませんでした。そこへ追い打ちをかけるように福島第一原子力発電所の事故があり、本当に心が折れそうになりました。私の自宅は避難地域にはあてはまらなかったのですが、多くの人々が自主避難をしている状況でした。このまま自宅で生活が続けていて大丈夫なのだろうか。幼い子供たちの為に安全な場所へ移ることが正解なのではないだろうか。食べ物、飲み物は本当に安全なのだろうか。外に出て自由に体を動かすことが制限されたまま子供たちは健康に成長できるだろうか。たくさん不安があふれていました。

しかし、子供たちの将来を考えると弱音を吐くことはできませんでした。子供たちに必ず明るい未来を見せてあげたい。せっかく助かった命なのだから生かされた者として現実から逃げずに立ち向かいたい。そう思うことでひたすら子育てに集中しました。時々不安で気持ちが押し

つぶされそうになりましたが、主人とよく話し合い、今の自分たちにできることを一つずつ実行させていただきました。震災復興では、今なお全国の皆様に応援していただき本当にありがとうございます。震災後、次男と三男が生まれ、現在は義父母と一緒に家族9人、おかげさまで元気に暮らしております。子供たちに明るい未来を残すため、これからも主人と力を合わせて毎日を精一杯頑張りたいと思います。

心癒える日まで



相澤 真由美
宮城県石巻市在住

東日本大震災から10年がたち、あらためて当時を振り返ってみると、私の記憶が途切れて思い出せないことに気づきました。そんな私の記憶のなかで思い出したこと。それは、地震が起きた日の朝、

菅家一郎氏に聞く

(前復興副大臣・衆議院議員)

家の上を無数のカラスが飛んでいたこと

です。それを見て、「地震が起きるのではないか」と感じました。それから数時間後に、本当に大きな地震に見舞われ、

街が津波に飲み込まれてしまったのです。

大きな揺れが始まり、大切なものを詰め込んだカバンを持って、次男と近所の方と一緒に避難所に車を走らせました。

街の中には、「大津波です！ 逃げてください！」という防災放送が流れていました。避難施設に着くと、すでに30人ぐらいたが集まっていました。私は連絡がとれない夫と長男のことが気がかりでした。その夜、何回もの余震に震えながら無事

を祈って夜が明けるのを待ちました。

食料も水もなく、わずかな飴玉やおせんべいをみんなで分け合う生活から四日目のことです。まだ胸まである水の中を泳ぐように夫と長男が避難していた施設に入ってくる姿が見えたのです。安堵の気持ちが入り込んで喜びの言葉も笑顔も向けることができませんでした。それは、まだ家族と連絡を取れない人たちがたくさんいたからです。そうした方々と共に生活をするなかで、行方不明のご両親を探す友人と何力所もの遺体安置所を訪ね歩きました。目を覆いたくなるような光景で

したが、見つけ出してあげたい一心でした。

避難施設からわが家に帰ることができたのは5月中旬のことでした。

泥に埋もれていた畳や家具の運び出しは、全国各地や海外からかけつけてくださったボランティアの方々がお手伝いくださいました。

いま、復興が進み、街は少しずつ変わり、生活は元の日常に戻っています。でも、心は「あの時」のままかもしれません……。いつか「あの日」を経験した誰もが、心癒える日を迎えられることを願っています。

東日本大震災から10年……。復興庁の設置法が10年延長され、令和3年から「第2期復興創生期間」が始まりました。これまでの取り組みと今後の展望を菅家一郎氏にお聞きしました。

——これまでの10年の取り組みについて教えてください。

被災前の状態まで再生することを目標にインフラ整備を行ってきました。

福島第一原子力発電所の事故で放射性に汚染された地域の除染が進み、汚染土壌をビニール袋に詰めたフレコンバッグが処理され、帰宅困難区域の方たちが戻る状況を迎えています。

復興庁にかかわらせていただき、福島、宮城、岩手各県の視察に何度も行かせていただきました。街が少しずつ甦^{よみがえ}ってきている光景を見て、復興の息吹を感じてきました。地元の市町村の皆さん、復興庁、関係省庁と連携して取り組んできた成果といえます。

——これからは、どのような取り組みが必要とされているのでしょうか。

震災前の暮らしに戻るまでには、多くの課題があります。大きなテーマは、生業やコミュニティの復興です。つまり、人口を増やし、賑わいや活気を取り戻すことです。

他の土地に避難している間に、子どもが生まれ、仕事に就いたりするなど、新しい生活を始めた方の中には、戻るかどうかわれていない方がいます。

原発事故でダメージを受けた帰宅困難区域については、特定復興再生拠点区域が甦るよう、再生に取り組んできました。しかし、震災前の人口にはなかなか戻らないのです。要因は、放射能が高いことや、いまだインフラ整備ができて

いないからだと考えられます。

さらには「風評被害」も大きな課題です。「福島県産の米や野菜は食べたくない」という方々がいること。諸外国においては厳しい輸入規制をしている国があります。

日本の食品の安全基準は100ベクレルパーキログラムです。ヨーロッパなど他国の基準は1000ベクレルを超えていますので、比較してみても、日本は充分、安全基準を満たしています。

また、再生利用土壌8000ベクレルという値は、生活するのに全く影響がないというデータがあります。安全を証明するために、モニタリング検査を行い、みなさんのご理解を得るための説明が必要だと考えています。これには、復興庁だけでなく、経済産業省や環境省をはじめ各省庁が連携して対応していきたいと思っています。

——具体的な方策をお聞かせください。

本年からは「第2期復興創生期間」に入り、復興の加速が求められています。

これからの5年間は、津波対策の総仕上げになる予定です。一方、原発の廃炉計画や汚染水対策が喫緊の課題です。

フレコンバッグは、県内のさまざまな場所に山積みされています。今年は、このフレコンバッグを中間貯蔵施設で処理し、再生利用土壌として使用することになりました。これは国家プロジェクトとして取り組んでいく予定です。

——菅家さんが心を砕かれてきたことはどのようなことですか？

東日本大震災が起きた当時、私は会津若松市長を務めていました。災害状況の映像を目にし、その後、福島原発事故の報告を受けました。

そして、会津若松市が熊鷹町の皆さまの避難場所として受け入れをさせていただくことになり、東山温泉、芦ノ牧温泉、市内のホテルを提供し、子どもたちには、空いている学校施設を使ってもらうことになりました。

そうした中で、私は被災された方々の心の痛みを感じたのです。「いつか故郷のために貢献してくれる若い人たちにとって、希望を抱いてもらえるような『復興』に力を注ぐべきではないか」と思い続けてきました。これからの一つひとつ、きめ細かな対応と取り組みを継続していきたいと思っています。

かんけ いちろう



衆議院議員。昭和30年生まれ。福島県出身。早稲田大学社会科学部卒業。平成3年、会津若松市議会議員に、平成7年、福島県議会議員に、平成11年、会津若松市長にそれぞれ当選。平成24年、衆議院議員総選挙初当選（第46回）。平成25年、衆議院総務委員会理事、自民党国土交通部会副会長を歴任。平成29年12月8日から衆議院東日本大震災復興特別委員会理事、自民党東日本大震災復興加速化本部事務局次長を務めたあと、平成30年10月4日から令和元年9月12日まで、環境大臣政務官、内閣府大臣政務官。令和元年9月、復興副大臣（第4次安倍第2次改造内閣）に就任した。

環境問題を考える
地球の未来を守るのは私たち

-5-

「地球温暖化」抑制のために私たちは何をすべきか——。
みなさんと共に、いまの地球を知り、
具体的な行動を考えていきたいと思ひます。

清掃員が見た ゴミの現状

ゴミ清掃員になって

お笑いだけで食べていけなかったので、ゴミ清掃員になった。妻が妊娠したので、金が必要になった。アルバイトをしようと、いくつか電話をしたのだが全て断られ、最終的に縁があって、ゴミ清掃員の仕事に就いた。だから、環境について何か思うことがあってゴミ清掃員になったとか、社会のために何か役立ちたいと思って始めたわけではなかった。環境問題の話をテレビ等で聴いても、結局そのうち誰かが何とかするだろうと思ひていたが、毎日ゴミを回収しているうちに、自ずと環境のことを考えるようになった。これだけ毎日ゴミが出るなんて、日本はそのうちゴミで埋まるのではないか。特に可燃ゴミと粗大ゴミがすごかった。

滝沢 秀一

お笑い芸人兼ゴミ清掃員



たきざわ しゅういち Profile

1976年、東京都生まれ。太田プロダクション所属。東京成徳大学在学中の1998年、カルチャースクールで出会った西堀亮とお笑いコンビ「マシンガンズ」を結成。「THE MANZAI」で認定漫才師に選ばれるなどコンビとしての実績をあげつつ、2012年、ゴミ収集会社で働きはじめる。2014年に『かごめかごめ』（双葉社）で小説家デビュー。2018年、エッセイ『このゴミは収集できません』（白夜書房）を上梓したあと、漫画『ゴミ清掃員の日常』（講談社）、『ごみ育』（太田出版）などを立て続けに出版している。最新刊は、『リアルでゆかいなごみ事典』（大和書房）。2020年10月、環境省『サステナビリティ広報大使』に就任。同12月、消費者庁『食品ロス削減推進大賞』の委員長賞を受賞。

僕は粗大ゴミ回収で、梱包から出されていない自転車回収したことがある。景品か何かで当たったが、乗らないから捨ててしまおうということだろうと思う。他にも真新しいサイドボードや綺麗なソファ、歪んでいないタンスが出ることは日常茶飯事だった。

回収してきた粗大ゴミを一旦集める中継所では、毎日よくもまあここまで布団が捨てられるものだと感心する。こういう光景は特別なものではなく、昨日も一昨日も、恐らく明日も一年後も変わらないだろう。

とりわけ可燃ゴミは手を抜かない多さだ。僕の行っている清掃工場のゴミピット（ゴミを溜める所）は横幅40メートル、奥行30メートル、深さ20メートルにも及ぶ大型のものが、年末年始は多過ぎて、ある程度燃やし終えるまでゴミを入れては駄目だと待たされる

時がある。それほどすごい量のゴミが出ている。

うちの自治体だけでこれだけのゴミが出るのならば、日本全国で言えばどれほどのゴミが出るのだろう。そう考えるのは自然の成り行きだったのかもしれない。中身を見ると食べ物、お歳暮のシーズンには全く手の付けられない高級ゼリーだったり、メロンまるごと3個だったり、干物セットなんかも見ることがある。新米が出る秋には、昨日まで食べられていたお米は、古米として捨てられてしまう。

ある自治体では可燃ゴミ全体の40%は食べ物に関するゴミで、その中の40%はまだ食べられる物が捨てられていると言われる。

僕はゴミピットの大きさを知っているので、

このうち3分の1以上が食べ物なのかと想像すると恐ろしい。もちろん食べ物もつたないということであるが、これを燃やすのに税金が使われているので、お金ももったいない。食べ物を燃やすことに関して、良いことは一つもない。

実は、東京都の最終処分場の寿命はあと50年と言われている。東京はまだ長持ちする方だが、全国のゴミの総量を国内にある最終処分場の容量で割れば、およそ20年だと言われている。

我々日本人は20年後にゴミが捨てられなくなるということ、実はあまり知られていない。

大切なことは「ゴミを「知る」こと」

ゴミ問題は陸だけではなかった。海や川も同じようにゴミであふれていた。

皆さんも見かけたことがあると思うが、車に踏まれているペットボトルは実は集積所から流れ出ている可能性は高い。

清掃員をやっているとよく見る光景なのが、ゴミ集積所をゴミ箱と勘違いしている人が多い。ゴミ集積所はあくまでもゴミを集積する所であって、ここに置いておけば誰かが何とかしてくれるだろうというようなゴミ箱ではない。具体的に言うと、ペットボトルやコンビニのアイスコーヒー、ホットスナック

の紙やマスク等がそのままポイ捨てされていることがある。

集積所にも風が吹き、ペットボトルが飛ばされることが多い。車に踏まれれば、ペットボトルは細かく砕かれ、雨が降れば下水に流される。下水でも処理できないほどの小さなものはマイクロプラスチックとなり、そのまま海に流される。また車に踏まれなくても、日本全国どこにでも川はある。川に流れればそのまませき止めるものもなく海に出る。

僕の知り合いに「荒川クリーンエイド・フォーラム」という慈善事業団体がある。この団体は荒川のゴミを拾う集まりだが、1年間に4万本のペットボトルを拾ったとホームページに書かれている。日本の河川には4万本以上のペットボトルが川に流れているということ。そう考

えれば恐ろしい。しかも、海のゴミの8割は、陸から流れてきている。このことから、僕らが今まで当たり前前に過ごし



てきた生活スタイルに無理が生じて、ゴミが陸からあふれ出してしまっていると言える。

海も陸もゴミであふれていることを知っている人は実はあまり多くない。しかし、それを責められないのは、僕自身もゴミ清掃員をやるまではそんな現状を知る由もなかったからだ。まず一番大切なことは「知る」ということである。

よく見かけるのだが、知らないで違反をしていることがある。ゴミ清掃員を長くやっている、わざと分別していないのか、分別しようとして間違っているのかは、すぐに分かる。後者は、知れば協力してくれる。

ゴミは民度を表しているような気がする。そして、その民度は、人が見ていない所で、どういう自分でありたいかというのを問うている気がする。見ていない所の行動を象徴するのは、ゴミが最たるものだと思う。誰も見ていないと思い、様々なものを袋の中に入れて排出するが、実は最後の最後にゴミ清掃員が見ていて、しかもその出し方も見ている。ゴミに関する様々な問題には、我々日本人の生活スタイルの歪みと、ゴミをどう扱っていくかという私たちのモラルが表れている。僕はゴミ清掃員になってゴミ問題から起こる様々な環境問題が、実はここまで切迫したものだとは思わなかった。